

その名はルージュ

八神大輔

intermission

病室のドアが静かに開き、緋の装束の女性が滑るように入ってきた。

メデイカルセンター内はすでに消灯しており、廊下の誘導灯のかすかな光だけが、部屋に差し込んでくる。それもすぐに閉ざされたドアで遮られた。

当然、面会時間外だ。だが、彼女はもちろんそんなことを意に介するはずもなく、いつもどおり無表情に歩いて、ベッドに近づいた。

ベッドでは、青い髪で穏和な印象を与える女性が、小さく寝息を立てていた。

少し前までは全身を包帯に巻かれ、集中治療室に隔離されていたが、今はもうほとんど傷も見あたらない。驚異的な快復力だと云えた。

傍らでしばしその女性の寝顔を見つめていた彼女は、そっと手を伸ばして、その青い髪を優しく撫でた。表情を変えず、しかし、とても優しい仕草で、そっと。

そして、踵を返して、来たときと同じように滑るような足取りで出ていこうとした。

「帰っちゃうの？ ルルージュ……」

小さな呟きに足を止め、緋色の魔女ルルージュは振り向いた。

ベッドでは、横になつたまま、千鳥がつぶらな瞳を開いて、いたずらっぽい笑顔を浮かべていた。

「起きていたんですの、千鳥」

「人の気配がしても目を覚まさないでいられるほど、のんびりした人生じゃなかったじゃない？ 私も……ルルージュも……」

少しだけ悲しそうな笑顔で、千鳥はそう答えた。

ルルージュは軽いため息をついて、千鳥のそばに戻った。

「北都さんなら、大口開けて寝ているでしょうけど」

「あはは、ひどいこと云ってる」

「妥当な推論ですわ」

「あはは、でも、そうかもね。そういうところが、気に入ってるんでしょ？」

「……くだらないことを」

つい、と面を背けるルルージュ。千鳥でなければ、照れ隠しだと到底わからないような仕草。

「北都ちゃんは、毎日お見舞いに来てくれるよ。ルルージュも一緒に来ればいいのに」

「騒がしいのはごめんですわ」

「素直じゃないんだから」

ルルージュをかばって重傷を負い、こうして臥所に横たわつて、それでも千鳥は変わらず太陽のように笑っていた。その笑顔を、ルルージュは真顔で、いつも以上に真剣な眼差しで、じっと見つめた。

「ん？ どうしたの、ルルージュ？」

「……約束なさい、千鳥。もう二度と、あんなバカな真似はしないと」

一瞬、千鳥の表情も真剣なものになった。ルルージュの思い詰めた視線を受けて、かつて一度だけ見た、その目の光。

けれど、次の瞬間には、やはり千鳥は満面の笑顔を浮かべていた。

「……バカなことしたとは、思っただけだな」

「千鳥」

「うん、でも、約束するよ。ルルージュを悲しませるようなことはしない……絶対に……」

……ほんのわずかに。ルルージュは、息を飲んだかもしれない。そして、あえて表情を消して、呟いた。

「……くだらないことを」

「……」

千鳥は、ただ微笑んでいた。

「もう、帰りますわ」

「あゝ、待ってよ、ルージュ」

云いながら、千鳥は手を伸ばした。子供のようになぐりぐりと振ってみせる。

「ね、眠るまでそばにいてよ。手、握っててくれると、嬉しいな」

「……なにを子供みたいなのを……」

はつきりと眉をひそめて、ルージュは嘆息した。

しかし、千鳥はニコニコと微笑んだまま、手をまっすぐにルージュに向けて伸ばしていた。

ルージュはもう一度深いため息をつくとき、千鳥の手を両手で包み込んだ。

「人の気配があると、眠れないんじゃないやありませんでしたの？」

「ルージュだってわかってれば、大丈夫だよ」

「……私は、一度、あなたを殺そうとしたのにな？」

夜の闇に紛れるような、囁きだった。

千鳥は表情を変えず、ただ穏やかに微笑んだまま頷いた。

「だから、誰より信じられるんだよ」

「……」

「おやすみ、ルージュ」

「……おやすみなさい」

笑顔のまま、千鳥は目を閉じた。間もなく静寂の中に、規則正しい寝息が混じり始める。

今度こそ本当に眠ったのを確認して、ルージュは千鳥の手を放し、青い髪を撫でた。

優しく、そっと、何度も。

我が子を慈しむ聖母のように。罪に泣いて、懺悔を捧げる

殉教者のように。

その口元には、小さな笑みが浮かんでいた。

*

「おつはよ、どう、千鳥、調子は？」

「あゝ、北都ちゃん、今日も来てくれたんだ。ありがと。勢いよくドアを開けて、北都がにこやかに入ってきた。千鳥も同じく笑顔で答える。春の日だまりのような病室だった。

「だいぶ調子いいよ。もうすぐ退院できるんじゃないかな」

「ほんと？ よかった。でも、無理しないでね」

ベッドの横に椅子を持ってきて座り、北都はそう云った。

千鳥は笑顔で頷いて、北都の頭をぐりぐりと撫でた。

「ほんと、毎日ありがとね、北都ちゃん」

「いいのいいの、どうせ何もすることないし。千鳥がいないと、絶対にルージュはラグオルに行こうとしないし」

子供のようになぐりぐりと頭を撫でられて、それでも嬉しそうに北都は目を細めていた。

「せめて、一緒にお見舞いに来てくれればいいのに、いくら誘っても『必要ない』とか云うんだよ。もう……」

不服そう、というより、少し悲しげに、北都はうつむいた。

千鳥には話していなかったが、北都は千鳥が負傷したあと、ルージュの涙を見てしまっている。ルージュは自分を責めるあまり、千鳥の前に現れないのではないかと……北都は、そんな心配をしていた。

千鳥は変わらず笑顔で、首を振った。

「いいのいいの。それより、ねえ、北都ちゃん。夕べはよく眠れた？」

「へ、あたし？ うん、そりゃもうぐっすり。あたしはいつ

も、快食快眠だよ」

「あはははは、やっぱり」

いつも以上に明るく、大笑いする千鳥。北都はなんのことかわからず、目を丸くして千鳥を見つめた。

「なあに？ なんのこと？」

「うん、なんでも。私もね、昨日はよく眠れたんだ」

「そうなんだ」

「うん。天使がね、そばにいてくれたみたいだよ」

「天使……？」

「うん」

今日の千鳥は、全く何を云っているのかわからない。北都は不思議そうに首を傾げるばかりだった。

千鳥は微笑んで、自分の手をじっと見つめた。

そこにまだ、夕べのぬくもりが残っているような気がした。

end

その名はルージュ

「お待ちせしました」

相変わらずおっとりした、千鳥の声が響く。

変わらないその声が、今日は本当に嬉しかった。

ドラゴンと戦い、ルルージュをかばって重傷を負った千鳥。長らく入院生活を送っていた彼女がやっと退院し、今日は記念すべき再出発第一日目だったのだ。

もう一度、三人でラグオルに降りられること。うん、こうしてまた三人一緒に揃うことができたことが何より嬉しくて、あたしは大きく手を振りながら振り返った。

「千鳥、おっそーい！……って……」

張り上げようとした声が尻窄みになり、目が点になる。ルルージュさえ、少し表情が変わったように思えた。

「ん？ どうしたの？」

ニコニコと微笑む千鳥の笑顔は、以前と全く変わらなかつただけ……。

服が、違った。

ルルージュと云えば「緋色」であるように、千鳥には「青」のイメージがあった。だけど、今、あたしたちの目の前にいる千鳥は、純白のコスチュームを身に着けていた。髪まで白く染めている。

「千鳥……そのカツ」……

「あ、これ。うん、せっかくだからね、イメチェンしてみただよ。似合う？」

屈託のない様子で、千鳥は首を軽く傾げた。

正直、ちょっと残念だった。千鳥には青がとても似合っていたし、実はあたし自身も青系統の衣装に青い髪だったからだ。お揃いのような気分だったのだけれど。

でも、こうして見ると、白い衣装も彼女にはすごく映えた。文字通り、天使がそこに降りたみたいだった。

「うん、すっごくいいよ！」

「えへへ、ありがと。ルルージュは？」

そう云って、千鳥はルルージュに目を向けた。あたしもルルージュの顔を見上げて 驚いた。

ルルージュは、いつも以上に眉間にしわを寄せて、千鳥を睨むような視線で見ている。わかりやすく云えば、非常に不機嫌に見えた。ルルージュがそんな風に感情を露わにするなんて、そうそうお目にかかれるもんじゃない。

「ど、どうしたの、ルルージュ？」

「……『青の戦慄』は返上ですの」

あたしの問いかけはやっぱり無視されて、ルルージュは千鳥に対して小さく呟いた。

……青の戦慄？ なんだろっ、それは。

首をひねりながら、あたしは千鳥に視線を戻した。千鳥は変わらず、笑顔のままだ。

「そんな名前は、とっくに捨てちゃったよ。あのスライサーと一緒にね」

「……」

「スライサー？」

スライサーってのは、投刃のことだ。青の衣装同様、千鳥と云えばダブルセイバーのイメージだったんだけど、以前の彼女はスライサー使いだっただんどうか？ 今日なんだかよくわからないことばかり……。

「ルルージュも、たまには衣装替えてみると、いいんじゃない？」

「……くだらないこと」

つい、とルルージュが面をそらす。もうすっかりいつも通りの調子を取り戻していて、吐き捨てるようでもなく、嫌み

でもなく、もちろん自嘲なんかじゃなく、ただ独り言のように、呟いた。

「どんな色だろうと、蠍は蠍ですわ」

「ルルージュ……」

初めて、千鳥の表情が曇った。ルルージュの横顔にじっと眼差しを向けたあと、悲しげに顔を伏せてしまう。

そんな、せつかく久しぶりに三人揃ったのに。どうして、服の色のことなんかで、こんなに気ますぐならなきゃならぬんだろ。

あたしは『青の戦慄』やスライサーの話も聞きたかったけど、これ以上、こんな雰囲気のままではいられなかった。

なんとかしなきゃ。二人の顔を交互に見ながら、一所懸命、別の話題を探す。

……だけど、その糸口は、簡単に外からやってきた。

「あれ……もしかして、千鳥？」

「え〜？」

不意に呼びかけられ、千鳥と一緒にあたしも振り向いた。ルルージュはいつも通り、瞳をちらつと動かすだけだ。

「あ、やっぱり。久しぶりね。入院してたって聞いたけど、もういいの？」

「あ〜、ラフィール〜」

笑顔を取り戻して千鳥が手を振ったその先には、あたしと同じような青い髪と青い服のハニエールが走ってこようとしていた。

もっとも、同じようなのは、髪と服の色だけだ。彼女はすらりと背が高く、勝ち気な色を瞳に宿した美人さんだった。どこことなく、品のいい感じがする。

ラフィール、と千鳥が呼んだその女性は、あたしたちの前に立つと、改めて千鳥に笑顔を向けた。

「元気そうで安心したわ。……あ、コスチューム替えたんだ」

「うん〜、似合う〜？」

「うん、とつても。でも、ちょっと残念かな。私とお揃いの色だったのに」

……あたしが云えなかったことをさらっと口にされたのが、ちょっと悔しかった。

千鳥とお揃い、だなんてあたしがはしゃぐのは、まだまだおこがましいような気がして、云えなかったのだ。それを何のてらいもなく云えちゃうこの人は、やっぱり千鳥やルルージュと同じくらい腕が立つんだらうか。その証拠に

「ルルージュも。お久しぶり」

「……どうも」

ルルージュが、挨拶を返したのだ。あたしと初めて会ったときなんて、見事に完璧に無視していたのに！

……嫌だ。なんだかすごく面白くない。

「それで、そっちが新人さんってわけ？ あなたたちが、駆け出しのハンターと組んでるって噂で聞いたときは、まさかと思っただけ……」

だから、彼女の口ぶりには、嫌みな調子なんか何もなかったけど。あたしは、唇を噛んでむすつと押し黙ってしまった。

「北都ちゃん？」

「……ん？ どうかした？」

千鳥とラフィールが、同時にあたしの顔を覗き込んでくる。あたしがキツと顔を上げて、何かを口にしようとした瞬間。

「私たちが誰と組もうと、私たちの勝手ですわ」

やはり独り言のように。視線は、あさつての方向を向いたままで。

そんな彼女の端然とした横顔を、あたしは口を開けて見つめてしまった。

かばって……くれた？ ルルージュが？

千鳥も、そしてラフィールも意外そうに目を瞬かせていたけど、やがてラフィールは小さく微笑んで、あたしに頭を下げた。

「そうね。……ごめんなさい、失礼な云い方だったわね」

「い、いえっ、あたしの方こそ……」

慌ててあたしも頭を下げる。ラフィールは笑顔で言葉を続けた。

「千鳥とルージュが見込んだんだから、きっと凄腕のハンターになるでしょうね」

「そ、そんな、あたしなんて……」

「そうだよ、期待の新人だからね」

「ち、千鳥まで、何を……」

「ね、ルージュ」

「存じませんわ」

「……」

やっといつもの調子を取り戻したあたしたちのやり取りを、ラフィールはなぜか不思議そうに見つめていた。

「……ふうん」

「？」

「ううん、なんでも。うちにもね、新人入ったんだよ」

「へへ、そうなんだ」

「そう、ちょっと元気よすぎるのが問題なんだけど……」

「ラフィール！ こんなどこにいたの!？」

「……噂をすれば、だわ」

軽く肩をすくめて、ラフィールが振り向いた。あたしたちも、そちらに視線を向ける。

そこには、炎の少女が、立っていた。

同じ赤系統なのに、ルージュとはあまりに印象が違う。

燃えるような紅い髪、紅い衣装、そして、炎のような強い意志を覗かせる紅い瞳。

彼女もまたハニユエルだった。

「何やってんの？ アインもヤジユも待ちくたびれてるよ」

「ごめんごめん。ちょっと懐かしい友達に会ってね。……あ、紹介しておくわ。この子がうちの新人、ジョルジュ」

「……ジョルジュ……？」

小さい咳きは、ルージュのものだった。見ると、なんてことだろう、あのルージュが険しい顔つきで、ジョルジュと呼ばれた少女を睨みつけている。

そして、その声に気づいたジョルジュも、また。

「あんだ、ルージュ……！」

切れ上がった双眸に憎しみを燃やして、ルージュを見上げていた。

「……なに？ なんなの？」

「ど、どうしたの、ルージュ？」

訊いてはみたけど、やっぱりルージュは答えない。ただつかつかと歩み、ジョルジュの正面に立った。

「ジョルジュですって？ 誰の許しを得て、その名を使っているのかしら、ミアン」

「……ミアン？」

「……その名前で、あたしを呼ぶな」

押し殺した声で、ジョルジュが答えた。けど、もちろんルージュがそんなことで怯むはずがない。それどころか、なんと彼女は手を伸ばして、ジョルジュの髪を掴んだのだ。これにはあたしも、千鳥も、ラフィールも、心底びっくりした。

「ル、ルージュ？」

「ご丁寧に髪まで染めて。品のないこと」

「うるさい！」

ジョルジュがルージュの手を払いのける。そして、今にもルージュに掴みかかりかねない様子で、叫んだ。

「あなたにだけは、指図されたくないね！」

「……」

一触即発。まさにその言葉通りの状況だった。

あたしはもう言葉もなく、オロオロするばかりだ。情けないけど、こうなったらもう、千鳥に頼るしかない。

……と、思ったんだけど。千鳥もなぜか、悲しげに眉をひそめながらも、口出しをせずに二人を見守っていた。

あたしは不思議に思いつつ、千鳥の袖を引っ張って、小声で囁いた。

「千鳥？ 止めないと……」

「……うん……そうだね……」

小さくため息をついて、千鳥はルージュとジョルジュの間に割って入った。

どうしたんだろう。ルージュも千鳥も、すごく変。

……あ。

そのとき、あたしはようやく気づいた。あたしの知らないルージュの過去。それに、あのジョルジュって子が、深く関わってるってこと？ 千鳥はそれを知ってるから。

「ルージュ、落ち着いて。気持ちはわかるけど……らしくないよ」

「……」

ジョルジュと激しく睨み合っていたルージュだったけど、千鳥の言葉に、ようやく目をそらした。

一方、ジョルジュは変わらず憎しみをたぎらせてルージュを見据えている。そんなジョルジュの頭を、ラフィールが軽くぼんと叩いた。

「あんたも。熱くなりすぎ」

「だって、ラフィール……！」

「何があつたか知らないけど、すぐ頭に血が上って、周りが見えなくなるようじゃ、命がいくつあっても足りないわよ」

「……」

リーダー（だろう、多分）に諭されて、さすがにジョルジュも口をつぐんだ。

これでどうにか一件落着、とあたしは胸を撫で下ろした。だけど、それは全くの早とちりで。

「けどまあ、このままじゃお互いすつきりしないだろうし。どう？ シミュレーションバトルでもやってみない？」

……なんていう提案を、ラフィールはしてきたのだった。「シミュレーションバトル？」

「そ。訓練用に、擬似的にハンターズ同士でバトルできる施設があるのは、知ってるでしょ。ま、遊びよ、遊び」

「……」

「……」

あたしと千鳥は思わず顔を見合わせ、そして同時にルージュを振り返った。

あたしとしては、危険がないのなら特に反対はしないけど、ルージュはそついうのに乗ってくるとは思えない。案の定、彼女はいつもと全く変わらない調子で、

「くだらないこと」と、切り捨てた。

その態度に、ジョルジュがまた噛みついてきた。

「ふん。怖いんだろ」

「……勝負したいのなら、シミュレーションなんて迂遠な真似は必要ありませんわ」

流し目でジョルジュを見て、ルージュが呟く。もうさつきみたいな激昂は見せないけど、それ以上に凄味がきいていて、鳥肌が立った。……妙に、艶っぽかったし。

「今すぐ地表に降りれば、即座にその首、刎ねて差し上げましょう」

「……んだと！」

あああ、艶っぽいなんて、見とれてる場合じゃなかった。

どうにか丸く収まりかけたっていうのに！
もうヤだ！ せつかく、久しぶりに三人揃った日に、どうしてこんなこと！

気がつけば、あたしは大声で叫んでしまっていた。

「わかった！ やろう！」

「……え、北都ちゃん？」

「やるよ！ もうこうなったら、はつきり白黒つけてやるんだから！ いいよね、ルージュ！」

ほとんど涙目になって、あたしはルージュに言い募った。

ルージュはそれでもやっぱりあたしの方を見ようとはせず、ただ、深い深いため息をついた。

あたしの剣幕に目を丸くしていた千鳥は、今はなぜか、上機嫌でニコニコしている。

ジョルジュは不機嫌にそっぽを向き、そしてラフィールは、なんだかとても驚いた顔をしていた。

そうして、あたしたちはシミュレーションバトルに挑戦することになった。

……はあ、なんでこうなっちゃうかなあ……。

2

「それじゃ、始めよっか。ルールは簡単、とにかくたくさん相手をぶん殴った方の勝ちよ。OK？」

満面の笑顔で、ラフィールはそんな物騒な説明をした。喜々としているように見える……のは、間違いではなかったらしい。

「ルージュや千鳥と手合わせできる機会なんて、そうそうないものね。楽しみだわ」

「……」

「お手柔らかにね」

ルージュはやはり興味なさげに黙殺し、千鳥も緊張感とは無縁の様子でニコニコと微笑んでいた。

あたしはと云えば、やっぱり緊張してた。

シミュレーションバトル。訓練のため、ハンターズ同士が対戦をする施設。

もちろん、実際に死傷者が出ることはない。ここではあたしたちの体を特殊なフィールドが覆っていて、武器の出力も、強制的に最低ランクに落とされている。攻撃を食らったときには、ダメージ量が試算されて、その結果「死亡」と判定されればマイナスポイント。そういう仕組みだ。

ハンターズになる前に、訓練所でやった模擬テストとほとんど変わらない。それはわかっていただけ、今度の相手は訓練生じゃない。ルージュや千鳥さえ認めている一流のハンター、ラフィールだ。

もう一人、ジョルジュの実力は未知数だけど、ラフィールが見込んでいるんだから、腕は立つんだろう。

それに引き替え、あたしはルージュたちに見込まれたわけじゃなくて、ただ自分から引っ付いてるだけだ。

勢いで、あたしが「やろう！」なんて云っちゃったのに、そのあたしが足を引つ張って負けたりしたら……。

あたしはそつと横目で、ルージュを伺った。

今ではもう、さっきのような激昂は欠片も覗かせていない。だけど、ルージュが実は激情家であることを、あたしはもう知っている。何があつたかわからないけど、ルージュのジョルジュへの敵愾心は並大抵のものじゃない。

勝負になった以上、負けるなんて絶対許されないうるなあ……。

今更ながら、あたしは自分の軽率さのため息が出た。

そのとき、ジョルジュが髪と同じように紅い瞳であたしを一瞥して、呟いた。

「そのちっこいのは、外してもいいんじゃないの」

「……え？」

はじめ、なんのことかわからなかった。

ちっこいのって……もしかして……あたし？

「いくら死ぬことはないたって、大段平でぶん殴られたら、ただじゃすまないよ。素人が参加するのは、危なすぎる」

むかつ。素人って何。

そりゃあ、あたしのキャリアなんて、ルージュたちに比べたら吹けば飛ぶようなものだけど、ジョルジュだってラフィールに「新人」って呼ばれてたじゃない。そんなにハンターズ歴は変わらないはずだ。

それに、「ちっこいの」って！ そりゃあたしは背が低いけど、ジョルジュとそんなに変わらないよ！

「そうだろ、ラフィール」

「うーん、そつね……」

「あたしは……！」

「人数的にも、その方が二対二でちょうどいいじゃん」

あたしが叫んでも睨んでも、ジョルジュは平気で無視して

る。悔しくて、あたしが思わず食ってかかろうとした、そのとき。

くくつと、喉で笑うような声が出た。

その主が誰だか気づいて、あたしは怒りも忘れ、茫然と彼女を見上げた。

ルージュは口元に指を当て、挑発的に微笑んでいた。

「何を難癖つけているのかと思えば、今から負けたときの言い訳でしたの」

「……なんだって！ 誰がそんな……！」

「三対二では勝ち目がない……そういうことにしたのでしよう？ そういつ云い方をすれば、北都さんが後には引かないと、わかっているでしょうに」

「あたしは……！」

「もう、いい加減にして、二人とも」

眉間にしわを寄せながら、ラフィールが間に割って入った。

「これからすぐバトルできるんだから。鬱憤晴らしはそつちでやってちょうだい。人数の話も、こつちはハンター二人、向こうはフォース二人にハンター一人なんだから、ちょうどいいでしょ。……もつとも」

ラフィールはルージュと千鳥を見やって、軽く肩をすくめた。

「並のフォースなら、だけどね」

「ひどい、人のこと、化け物みたいに云ってる」

千鳥がこころごとく笑う。おかげで、場の雰囲気がよく少し和らいだ。

それにしても、ジョルジュが絡むと、ルージュはほんとに、別人みたいだ。いや、たがが外れてしまつ、と云つべきなんだろうか。

「じゃあ、登録するわよ。うちはチーム名『デストロイ』、メンバーはラフィールにジョルジュ……つと。そつちのチーム

名は？」

端末に打ち込みながら、ラフィールが振り向いて問いかけた。

「……」

「……」

「……」

あたしと千鳥は、思わず顔を見合わせた。ルルージュはいつもどおり、我関せずという態度だ。

チーム名。そういえば、特にそういうの、考えたことなかったな。

「なに、ないの？ 結構、長くやってるんでしょ？」

「あはは、そうだね」

「そうだねって……うん、じゃあ……」

首をひねりながら、ラフィールはあたしたち三人を順番に眺めた。赤・白・青。

「三色旗でいつか」

「……」

「……」

「……」

正直、そのセンスはどうかと思っただけど、いい代案もなかったんで、とりあえずそのチーム名で登録をすませた。

「じゃあ、行くわよ」

ラフィールが施設へのゲートを開く。そこに踏み込めば、いよいよシミュレーションバトルが始まるのだ。

それが適切な表現なのかどうかかわからないけど、その場所の雰囲気は、「荘厳」という感じだった。

やや薄暗い照明で、壁や床は淡い青。壁は高くそびえ、天井がどの辺りにあるのかもわからない。

「なんか……不思議な雰囲気……」

「モチーフは、『神殿』だって話だからね」

神殿。なるほど、云われてみれば、そんな感じだ。

初めてラグオルに降りたときと同じように、あたしはきよるきよると周りを見回していた。

「行きますわよ」

いつもどおり、ルルージュが先頭を切って歩き出す。

慌ててそのあとに続いたけど……これから、どうすればいいんだろ？

「あたし、てっきり、道場みたいな場所で、果たし合いとかするのかと思ってた……」

「……」

「あはは、それも面白いかもね」

やはりいつもどおり、ルルージュは反応なしで、千鳥だけが言葉を返してくれる。

それが、なんか、嬉しかった。

ちよっと予定とは違って、ラグオルに降りるんじゃないかって、こんなことになっちゃったけど、それでも前と同じように、三人で行動できる。ずっとこの日を待っていたんだから。

「やることはね、地表と同じなんだよ。この中を探索して、相手チームと出会ったら、やっつけるの」

「そうなんだ。でも、結構広そうだけど……ラフィールたちを見つけるだけで大変なんじゃ？」

「それはそうだけど」

「……出てくるのは、人だけではありませんわ」

振り向きもせず、独り言のようにルーージュが呟いた。

今日のルーージュは、ほんと、多弁だなあなんて、あたりは
はどうでもいい感心をしていたりする。

「え？ どういうこと？」

「モンスターも出るよ」

「ふーん。……って、ええっ!？」

そんな、今の武器じゃ、ろくな攻撃力もないっていうのに
!?

思わず足を止めて蒼白になったあたしに、千鳥はまたこゝろ
と笑って見せた。

「もちろん、本物じゃないよ。ホログラフィー」

「な……なんだ、びっくりした」

「攻撃されれば、もちろんダメージは受けるけどね。『死亡』
って判定されたら、同じようにマイナスポイントだよ」

なるほど。これはほんとに実践的な訓練施設なんだ。ラグ
オルで探索するのと、同様の経験ができるようになってる。

ハンターズ同士の対戦がアリなのは、シミュレーションでは
出せない、予測不能な動きを取り入れるためか。

でも、なんにしる命の危険はないんだから。いい機会だと
思っ、修行させてもらお。……足は、引張らないように。

「あ、それと、こっつて迷路みたいで迷いやすい構造にな
ってるから。気をつけてね」

「うん、わかった……」

ぶつぶつと一人で考えていたところで、千鳥の声に慌てて
顔を上げた。

「……あれ？ いない？」

考え込むと同時に、あたしは足を止めてしまっていたらし
い。慌ててルーージュたちのあとを追った……つもり、だっ

ただだけど。

「あれ？ あれ？ こつちじゃなかったのかな？」

少し走っても姿が見えないので、慌てて引き返す。今度は
違う角を曲がってみるけど、でもやっぱり、そっちにもいな
い。

え？ え？ ええええええっ？

迷っ……ちやつ……た……？

泣きそうだった。

迷子になって涙を見せるなんて、絶対できっこないことだ
けど。ルルージュに見られたら、その場で縁を切られるだろ
う、きつと。

でも、一人でうろろろするのが、こんなに淋しいことだっ
たなんて、知らなかった。

思えば、あたしは一人で探索に出たことがない。正規のハ
ンターズになって以来、ずっとルルージュと千鳥と一緒にだっ
たんだ。

彼女たちは超一流のハンターズだから、一緒にいれば心強
い。情けないけど、あたしはずっと守ってもらってた。

でも、ほんとの理由はそんなことじゃなくて。やっぱりあ
たしはただ単純に、「一人」であることが、嫌だったんだと思
う。もっと正確に云えば、ルルージュや千鳥と離れているこ
とが。

……ルルージュは、千鳥と組む前は、ずっと一人で行動し
てたって、聞いたことがある。いったい、彼女はどんな気
持ちで、たった一人、あの鎌を振るっていたんだろう。

そんなことを考えていて、周りへの警戒があるそかになっ
ていた。ルルージュに何度も云われていることなのに。いつ
でも冷静に、周囲に気を配ってた。

「やあああああああつ!!」

物陰から、紅い影が飛び出したと思つた瞬間。裂帛の気合
と同時に、巨大な刃がまっすぐに振り下ろされて

「!!」

反射的にハンドガンを構えようとしたものの、間に合うは
ずがなかった。あたしはやってくる衝撃に備え、思わず奥歯

を噛みしめたのだけれど。

「……?」

あたしの頭を直撃するはずだった真紅の刃は、文字どおり
紙一重、ぎりぎりのところで止められていた。

「……なんだ、あんたか」

拍子抜けしたような、だけど、どこかほっとしたような声
でそう云うと、彼女は剣を下ろした。

そう、あたしの身長と同じくらいあるその大剣を振り回し
ていたのは、あたしと同じように小柄なジョルジュだった。

服や髪の色と合わせたように、その剣もまた炎のように紅
い。あの体で、よくあんなでっかい剣を操れるものだ。

……なんて、感心をしている場合じゃなかった。

「どうして、止めたの?」

「……へ?」

「あのタイミングなら、絶対倒せたのに。あたしなんて、相
手をする気にもなれないっていうこと!？」

バトルを始める前のやりとりのこともあって、あたしは頭
に血が上ってしまっていた。これ以上、バカにされればなし
じゃいられない。

それに対して、ジョルジュは少し困ったように首を傾げ、
頬をかいた。

「あー……いや、そういうつもりじゃないんだけど……」

「じゃあ、なんで?」

「だって……恨みのない奴を殴ったって、楽しくないだろ?」

「……え……?」

思いがけない言葉に、あたしは目を点にしてジョルジュを
見つめた。

ジョルジュは照れたように、視線をそらして笑っている。

そうしてると、意外に女の子らしい可愛らしさもあって、あ
たしはますます驚いてしまった。

「さつきも……悪かったね。あんたは口の利き方を知らないって、ラフィールにもよく怒られるんだけど。別に、あんたのことバカにして、外せって云ったわけじゃないんだ。ただ、今回のことは、あたしとルージュの個人的なことだからさ。危ないことに、関係ない人を巻き込みたくなかったんだよ」

「……関係なく、ないよ。あたしとルージュは、同じチームだもん」

「……ふうん」

ちろつと、横目でジョルジュはあたしを見た。意外そう、という感じだろうか。あたしは別に変なこと云ってないと思うけど。そういえば、ラフィールも時々そんな表情をしたな。

「ま、なんにしろ、あたしはルージュと勝負したかっただけなんだ。ほかのことはどうだっていいよ」

ぶっきらぼうな台詞。だけど、彼女が誰彼なく傷つけないと思うような人じゃないことはわかった。ただ、ルージュを除いて。

「……さつき、『恨みのない奴を殴っても楽しくない』って云ったよね」

「ああ」

「ジョルジュは……ルージュに恨みがあるの？」

「……」

「どうして？」

ジョルジュの面が不意に引き締まる。唇を噛んで、何度か言葉をはき出そうとし、けれど、あたしの質問に答えてはくれなかった。

「……人に話すよつなことじゃない」

「……」

「きつと、周りから見ればつまらない意地だからね。だけど、あたしは……あいつを越えなきゃいけないんだ……」

「ジョルジュ……？」

「今はまだ叶いつこないって、わかってるけどさ。でも、いつかきつと……あたしもラフィールぐらい強くなれば……」

そう呟いたジョルジュは、本当に悔しそうに、唇を噛みしめていた。

その姿に、あたしはそれ以上詮索できなくなってしまった。結局理由はわからないし、聞いてもきつと賛成できないけど、それでもジョルジュには戦う理由がある。どうしても強

くなりたい、ならなきゃいけない訳がある。

それはルージュも、そしてきつと千鳥も同じだ。だったら、あたしは……？ あたしは、どうして、戦ってるんだろ……？

なんだか自分自身がとても薄っぺらい存在に思えて、どうしようもなく悲しくなってる。それで、あたしはこの話題から逃げるように、どうでもいいことを口にしていた。

「ラフィールって、そんなに強いんだ？」

「……へ？ 本気で云ってるの？」

眉をひそめて、ジョルジュがあたしの顔を覗き込んでくる。あたしがこくこくと頷くと、ほとほと呆れた、というように頭を振って、ため息をついた。

「何にも知らないんだねえ、あんた。だから、ルージュなんかと組んでられるのか……」

「それとこれとは関係ないでしょ」

「ああ、悪い悪い」

苦笑しつつ、頭を下げるジョルジュ。

この短い時間で、彼女に対する印象はだいぶ変わってしまった。きつと、いい友達になれると思う。……ルージュのことが、なければ。

「今、現役のハンターズで腕つきといえれば、むかつくけどルージュ、それに千鳥、ラフィールだろ。もう一人、赤い

ヒューキャストのSWORDってのがいるけど……こっちはもう伝説に近いかな」

「……へえ」

驚いた。ルージュや千鳥が凄腕なのは知ってたけど、ハクターズの中でも三本の指に数えられるほどだなんて。その二本とあたしなんかチーム組んで、ほんとにいいんだろぅかって気がしてきちゃった。

「ま、近い内にもう一人、あたしが数えられるようになる。

……それまで、元気でいなよ」

自信たっぷり笑顔でそう云って、ジョルジュはあたしに右手を差し出した。

あたしも思わず笑顔を返して、その手を握ろうとした瞬間。

「！」

ジョルジュが飛びすさった。

一瞬前までジョルジュがいた場所を稲光が突き抜け、壁に刺さり黒煙を上げる。

雷撃系テクニク ソンデ？

「不意打ちとはあんたらしいね」

さっきまでのにこやかさをかなぐり捨て、紅い瞳をさらに真紅の炎に燃やして、ジョルジュは紅い大剣を構えた。

その先にいるのは、もちろん。

「北都さんから離れなさい」

禍々しい大鎌を携えた、緋色の魔女だった。

一気に高まった緊張感に、あたしは身動きも取れなくなっていた。

本当は、この二人が争うところなんて、見たくないのに。どうにかして止めなきゃって思ってるのに。

だけど、二人が互いに結んでいる視線の激しさは、とてもあたしなんかには踏み込める余地はなくて。ただおろおろと、ルージュとジョルジュの顔を見比べるだけだった。

「不意打ちがどうこうなどと、人質を取ろうとするような輩に云われる筋合いはありませんわ」

一步踏み出しながら、ルージュが呟く。

ジョルジュは大剣を構え直しつつ、眉をひそめた。

「人質……？」

「もう一度だけ云います。北都さんから離れなさい」

え……？ 人質って……あたしのこと……？

「そんな、ルージュ、ちが……っ」

「なるほど」

「……え……？」

慌てて事情を説明しようとしたあたしの喉元に、ジョルジュが大剣の切っ先を当てた。

あたしは驚いてジョルジュのほうを見たけど、彼女はあたしを見ていない。ただルージュしか目に入らないように、強い眼差しをルージュに向けていた。

「そういう手もあったか。それであんたが本気になるんなら、いいかもね」

「ジョルジュ!? そんな、嘘だよな？」

「……下劣な真似を」

険しく眉をひそめて、ルージュが吐き捨てた。苛立ちを

示すかのように、ソウルイーターを振りかぶる。

「やはりあなたには、『ジョルジュ』などと名乗る資格はありませんわ、ミアン」

「その名前であたしを呼ぶなんて、云ってるだろう！」
叫ぶやいなや、ジョルジュは大剣を突風のような激しさで振り回し、ルージュに斬りかかった！

岩さえも砕きそうなその斬撃は、しかし、ルージュの手にした鎌で、簡単に受け止められてしまった。

双方の刃越しに。ジョルジュは炎と燃える腫で、ルージュは氷のように冷えた視線で、互いを睨み据えていた。

「そもそも、勝って生き残るためならどんな手でも使うってのが、あなたのやり口だろうが。下劣だっけ？ 笑わせるんじゃないよ」

「……」
「それとも、そんなあなたでも、仲間は大切だったの？ それこそお笑いだよ。だったら、なぜ、あとき」

「……黙りなさい」

ルージュが体勢をわずかにずらし、ジョルジュの剣の勢いを流した。思わず体が泳ぎそうになるジョルジュに、躊躇なくルージュがソウルイーターを振り下ろす。ジョルジュはかろうじてそれを剣で弾きつつ、後ろに下がった。

……ダメだ。ジョルジュの渾身の一撃さえ、ルージュはあっさりいなしてしまっ。やっぱり、今のジョルジュにはまだ、勝ち目がないよ。

あたしは祈るような気持ちで、ルージュを見上げた。だけど、彼女はいつも以上に感情のない表情で、ジョルジュを見据えていた。

「おしゃべりには、もううんざりですわ。あなたが『ジョルジュ』の名に、そしてそのドラゴンスレイヤーの使い手としてふさわしいと云うのなら、実力でそれを示してこらんなさ

い」

「……！」

唇を噛みしめ、ジョルジュが大剣 ドラゴンスレイヤーというらしい を大きく振りかぶる。全身をパネに、ルージュに向かって跳躍しようとした刹那。

静かな詠唱が響いた。

はっと全員が声のした方に振り返る間もなく、氷の散弾がジョルジュに向けて飛来した。

「なっ……」

慌ててジョルジュが飛びすさったものの、間に合わず、何本かの氷柱が彼女にダメージを与えた。

これは……ギバータ？

「油断大敵」

ころころと鈴を鳴らすような声で笑いながら、詠唱の主が現れた。

白い装束に天使の微笑 千鳥だ。

「あなた……！ 何の真似だよ！」

「何って？ だって、これはチームバトルだよ？」

激昂するジョルジュに対して、千鳥はいつもと変わらない笑顔で、しれっとそんな風に答えた。

……驚いた。千鳥って、意外とそういうところシビアなんだろうか？ シティでルージュとジョルジュが争ったときは、なるべく口を挟まないようにしてるように思えたんだけど……。

「ラフィールはどうしたの？ もしかして、ジョルジュち

やんも迷子？」

「……」

ジョルジュの顔がかすかに赤くなる。

なんだ、ジョルジュもあたしと同じように、はぐれてたんだ。

「三対一じゃ勝ち目はないと思うよ。ラフィール探した方がいいんじゃないかな」

「……ちっ」

舌打ちし、最後にもう一度ルージュを睨むと、ジョルジュは走り去った。

ルージュは追い打ちをかけるでもなく、不機嫌そうに千鳥の方を見ている。千鳥はその視線に気づいていないふりをしながら、あたしの方に歩いてきた。

「北都ちゃん、大丈夫？」

「う、うん、あたしは全然平気」

「よかった。迷子になっちゃダメだって云ったそばから、いなくなっちゃうんだもん。心配したよ」

「うん……ごめんね」

「いいのいいの。じゃ、気を取り直して行こうか。ね、ルージュ？」

振り返り、軽く首を傾げて千鳥はルージュに笑いかけた。だけど、ルージュはやっぱり不機嫌そうな表情のまま、小さくため息をついた。

「……余計な真似をしてくれたのですわ」

「え？ なんのこと？」

「今度邪魔をしたら、千鳥でも許しません」

「ん、わかんないけど、わかった」

ころころと、千鳥が笑う。ルージュは再びため息をついた。

それで、あたしはようやく千鳥の行動の意味がわかった。

千鳥はルージュとジョルジュの勝負にあえて水を差すことで、二人の対決を止めようとしたんだ。

……叶わないなあ、やっぱり。

「ねえ、ルージュ。……やっぱり、もう……やめない？」

「……」

「あたしがやるうって云いだしておいて、何を今更って思うのは当然だけど……。でも……」

「……行きますわよ」

ムダと知りつつ云ってみただけど、やっぱりムダだった。ルージュはあたしの言葉なんてまるで耳に入らないように、端然と歩き出す。

肩を落として、あたしはそのあとに続こうとした。そのとき、前を向いたままで、ルージュが呟いた。

「戦いたがっているのは、あちらの方ですわ」

いつもと同じく、独り言のように。だけど、わずかに苛立ちをひそめて。

「とりあえず、お互い気がすむまでやらせるしかないかもね」

口調こそ変わらなかつたけど、やっぱり千鳥も少し沈んだ様子で、あたしにそう囁いた。

「うん……そうなのかな……」

「しょうがないよ。ひよっとしたら、思いつきりケンカしたあと、仲良くなるかも知れないし」

……それは絶対ないと思う。

だけど、責任を感じて暗くなっているあたしを察じて、千鳥はそんな風に云ってくれるんだろう。

うん、止められないんなら、せめてどっちも大ケガしないよう、フォローに回ることによつ。……ルージュの邪魔をすると、自分が大ケガすることになるかも知れないけど。

強いて笑顔で頷いて、あたしは今度こそ迷わないよう、二人のフオマールのあとに続いた。

その思いがけない事態は、あたしたちが歩き始めてから、ほどなくやってきた。

「北都さん」

「は……はいっ!？」

あたしは思わず背筋を伸ばして、授業中、居眠りをしているところを突然指された生徒みたいな返事をしていた。

だって、ルージュがあたしに呼びかけることなんて、そうそうあることじゃなかったから。ひよっとしたら、こないだのドラゴン戦以来、初めてかも……。

自分から話しかける分には、だいぶ慣れてきたんだけど、話しかけられると、今でも緊張してしまう。

そんなあたしの様子には相変わらず無関心な様子で、ルージュは振り向かずに言葉を続けた。

「ミアンから、何か聞かされたんですの？」

ミアン……ああ、ジョルジュのことか。

なぜルージュはジョルジュをミアンと呼ぶのか……、そして、ジョルジュはなぜそれをああまで嫌がるのか……ほんと、わからないことばかりだ。

千鳥が心配そうに表情を陰らせて、あたしたちを見守っている。

あたしは軽く首を横に振った。

「……ううん、なんにも」

「……」

「ただ……ルージュより強くなりたいって……そう云ってた」

「……くだらないことを」

やはり表情を変えずに呟くと、彼女はもう口をつぐんでし

まった。

ルージュとジョルジュの間にあつた出来事……それをあたしが聞いたのかどうか、確かめたかったのだから。そういうことを気にするのは、とてもルージュらしくない気がするけど……それだけ、重要な話だつてことかな。

正直、すごく気になるし、教えてほしい。だけど、ルージュの背中はそのような問いかけを完全に拒絶していた。

それに、ジョルジュでさえ語ろうとしなかったことなのだ。あたしなんか、ただの好奇心で踏み込んでいい問題じゃない……そう、思えた。

「ああ、それともう一つ……ルージュと千鳥とラフィールが、今のハンターズじゃ三強だつて聞いたよ」

「……」

「あはは、それは、私に関しては買いかぶりだね」

千鳥が満面の笑顔でそんなことを云った。

「え……どうして?」

「ルージュとラフィールは別格だもん。私なんて、全然相手にならないよ」

「……」

ルージュが横目でちらっと千鳥のほうを見た。思いつきり異議あり、という視線だ。

千鳥は涼しい顔でその視線を受け流して、相変わらずニコニコしている。

「ルージュの強さは、もうよく知ってると思うけど、ラフィールもすごいよ〜」

「そ、そうなの?」

ラフィールも、どちらかといえば物腰穏やかで、上品な感じの女性だった。彼女がどんな風に戦つか、想像もつかない。

もっとも、見かけによらないのは、今、あたしの目の前に

いる二人が、最たるものだと思うけど……。

「そうだよ。ラフィールがなんて呼ばれてるか、知ってる？」

「ううん」

「ジョルジュから「もの知らず」と呼ばれたあたしだ。ラフィールの存在自体を知らなかったのに、あだ名を知っているわけがない。」

「……女豹」

「……え？」

ぼつりと、ルージュが呟いた。

ルージュが会話に参加してる！……なんて、あたしは本人に知られたら、睨み殺されそうなことを考えていた。

……そして、例によって、周りへの警戒が、おろそかになつていたので。

「そう。豹みたいに、静かに近づいて、いきなり爪を立てるんだよ。……こんな風にね」

緊張感の欠片もない台詞とは裏腹に、電光の素早さで千鳥はダブルセイバーをあたしの前に掲げた。

ガシツと何かが激しくぶつかる音がして、フォトンの刃が重なり合う火花が散る。

目を丸くしたあたしの目の前で、千鳥のダブルセイバーと……いきなり飛びかかってきたラフィールのクローとが重なり合っていた。

「……ちえっ。やっぱりあなたたちには、不意打ちなんて意味ないわね」

実に嬉しそうにそう云うと、ラフィールは唇をべろつと舐めて、後方に飛びすさつた。そして、少し腰を落として、両手にはめられたクローを構え直したんだけど……。

あれは……あの武器は、クローなんだろうか、果たして？
まず、サイズがとんでもなく大きい。両腕をすっぽり包み

込むような感じだ。前方の文字どおり「爪」だけでなく、後方、肘のほうにも大きなトゲが伸びている。装飾も豪華で……なんとというか、ものすごくゴージャスな武器だ。

「……ハート・オブ・ボウム」

「相変わらず、派手だね」

目を白黒させているあたしの疑問に、ルージュと千鳥が答えてくれる。

ハート・オブ・ボウム！

もの知らずなあたしでも、その名前は知っていた。ルージュのソウルイーター同様、ううん、それ以上に伝説的な最強武器。名前だけで、実在しないんじゃないかとまで云われていた、あの？

「うふ。そうやって驚いてもらえると、やっぱり嬉しいな」
云いながら、ラフィールはにっこりと笑った。とても上品で……だけど、なんだかとても恐ろしい笑顔。獲物を前にした、肉食動物みたいな。

「うちの新人、だいぶ可愛がってくれたみたいじゃない。あんなへこんだ姿、初めて見たわ」

「……ラフィール、余計なこと云わなくていいよ」
ラフィールの背後から、無然とした表情でジョルジュが姿を現した。手にしているのは真紅の大剣、ドラゴンスレイヤ

ー。

彼女たちも、うまく合流してたんだ。

「私はあなたたちの間に何があつたか知らないし、興味もない。でもね、身内をコケにされて、黙ってるわけにはいかないの」

笑顔のまま、ラフィールの目がすうっと細くなっていった。

いや、あれはもう笑顔じゃない。だって、瞳の奥には、あんなにも敵意が燃えさかって。

「遊びのつもりだったけど。本気になっちゃっうね」

その言葉が耳に届いた瞬間、ラフィールの姿が消えた。

あたしの目では捉えられないほど速く跳躍したんだって気づいたのは、ラフィールの攻撃をルルージュが弾いた音が響いてからだだった。

ラフィールは怯みもせず、矢継ぎ早に両手のクローで攻撃を繰り返す。ルルージュは後ろに下がりながら、ソウルイターでそれらをさばっていた。

なんてことだろう。あのルルージュが、防戦一方で、反撃の際を見出せないでいる。

さらに、驚いたことに。ラフィールの背に向けて、千鳥がゾンデを放とうと詠唱に入った瞬間、ラフィールは身を翻して千鳥に矛先を転じたのだ。さすがに千鳥はそれをよけたものの、詠唱は中断されてしまった。

「やだ、チーム戦なんて、云うんじゃなかった」

「……口より、手を動かしなさい」

ルルージュと千鳥が同時に斬りかかるけど、ラフィールは素早い動作でそれを避ける。それだけじゃなくて、避けると同時に蹴りを放って、二人を牽制するのを忘れない。とにかく手数が多くて、それを受けるのが精一杯だ。

……まずい。やっぱ、接近戦主体じゃ、いくら二対一でもフォースとハンターじゃ分が悪すぎる。

せめて、あたしが牽制して、ルルージュたちが反撃する糸口を作らなきゃ。そう思って、あたしがハンドガンを構えたとき。

「あなたの相手はこっちだよ！」

叫びと同時に、ドラゴンスレイヤーが振り下ろされた。

あたしは無様に地面を転がりながら、どうにかそれを避ける。

「ジョルジュ！」

「悪いね。ラフィールがその気になっちゃったからさ。個人的な勝負ならともかく、チームの看板背負ってる以上、負けるわけにはいかないんだ」

「そんな……！」

あたしは、どうにかしてルルージュとジョルジュの対決を止めたいって思ってたのに、それがこんなチーム同士の総力戦になるなんて。あたしの考えが甘かったってこと？ バトルやろうなんて、あたしが考えなしに云っちゃったから……。表情をゆがめたあたしを見て何を思ったのか、ジョルジュは剣を下ろして、笑いかけてきた。その笑顔は、なぜだか、カチンと来た。

「ギブアップしなよ。そうすれば、ケガせずにすむ。ルルージュなんか、そこまでつき合う義理はないだろ？」

……その言葉に。あたしの中で、何かがぶつんと切れた気がする。

あたしはハンドガンを持ち上げると、続けざまに引き金を引いた！

「ど、どわっ!?」

慌ててジョルジュが飛びすさつて避ける。あたしはもうためらわず、彼女に照準を向けた。

「あたしたちだって、チームだもん！ 仲間見捨てて逃げるなんて、絶対しない！」

そうだ。あたしにはジョルジュみたいに、誰かを越えたいという強い目標もない。ルルージュが胸に秘めているような、燃えるような情熱もない。

だけど、それでも、あたしが戦っていられるのは、きっと、ルルージュや千鳥と一緒にいたいっていつ、ただそれだけの想いだから。

だから絶対に、逃げたりしない！ それを誰かを傷つけることになっちゃって！

その叫びに、ジョルジュは茫然とあたしの銃口を見つめた。いや、ジョルジュだけじゃなくて。なぜかラフィールも、千鳥も、そしてルージュも動きを止めて、みんな、じつとあたしのほうを見つめていた。……な、なんで？

「……だつてさ。ルージュ、聞いた？」

ジョルジュが嬉しそうに それでいて、泣き出しそうにも見える表情で、呟いた。

ルージュは答えない。いつもと同じく、無表情に、ほんのわずか物憂げに眉をひそめて。

ジョルジュがドラゴンズレイヤーを振り上げた。

「あんな、根性あるね。そういうの、好きだよ、あたし。……だから、もう手加減しない」

紅い旋風が巻き起こった そんな感じだった。ジョルジュは本当にあの小柄な体のどこにそんな力があるのか、ドラゴンズレイヤーをぶん回して、あたしに斬撃を繰り出してきた。

あたしはもう見栄もへつたくれもなく、地面をころころ転がってどうにかそれを避けつつ、文字どおり闇雲にハンドガンを撃ちまくった。

こんなことで勝てるとは思ってなかったけど、とにかくあたしがジョルジュを引きつけておけば、ルージュと千鳥はラフィール一人に専念できるんだ。

その心意気やよし、と、自分を褒めてやりたいくらいだった。あたしがちゃんと地形を考えて戦えるくらい、しっかりしてれば、ね。

「う、うわ、まずっ」

「もらった！」

ここが迷路みたいに細い道筋で構成されてるってことをすっかり忘れていたあたしは、袋小路に追い詰められてしまった。もう逃げ場はない。

迫り来る一撃を観念して、せめて一矢報いようと、ハンドガンをまつすぐ構える。

しかし。今度もまた、真紅の大剣はあたしの頭を直撃しなかった。

それはジョルジュがさっきのように、ぎりぎりで止めてくれたわけじゃなくて。

「ルージュ！」

「……周りを見なさいと、いつも云っているでしょうに」

ソウルイーターを逆手に持ち、その刃でドラゴンズレイヤーを受け止めてくれたルージュが、やはり独り言のようにそう呟いた。

ルージュがとつさに飛び込んで、あたしを守ってくれたのだ。

だけどそれは云うまでもなく、致命的な隙を生むことになって。

ラフィールのハート・オブ・ボウムがルージュの背後に迫る。千鳥のフォローム間に合わない！

思わずあたしが目を閉じそうになった刹那。

ルージュは、ソウルイーターを捨てた。

そのまま素早く身を翻して、避けるのではなく、ラフィールの懐に飛び込み。

パン、と、乾いた音がした。

「な……」

「え……」

「うわ……」

「あはは、痛そう」

場違いな明るい声で、千鳥が笑う。だけど、もっと場違いだったのは、ルージュが使った技のほうだっただろう。

技……と云っていいんだろうか。

ルルージュは、ラフィールの頬に平手打ちをお見舞いしたのだ。わかりやすく言えば、ビンタしたってこと。

ラフィールは頬を押さえて茫然とし、ジョルジュもぽかんと口を開けている。

一方、当のルルージュはいつもと全く変わらない端然とした様子で、ソウルイーターを拾い上げた。そして、やはりいつもどおり、つまらなそうに呟いた。

「武器やテクニクだけが、戦う道具ではありませんわ」

「……」

目を点にして、ラフィールはルルージュを見つめている。

やがて、その口元がゆがみ、肩が震えだした。

「……ぷ……く……く……ははははははっ」

ついにこらえきれない様子で、ラフィールが大笑いした。笑いすぎてにじんだ涙を、指の端ですくう。

「……どうでもいいけど、あんなごつい武器つけてて、器用だなあ。」

「さっすが『緋の蠍』よね。あのタイミングでソウルイーターを振り直すのは、絶対間に合わないもの。詠唱だってもちろん。あそこで武器を捨てるって決断が、とっさにできるなんて。やっぱりあなたがナンバーワンかしら」

「……ほんとに。あたしなんて、もうダメだ！ って意識しか出てこなかったのに。」

ルルージュはいつだってクールに、正確に状況を分析して行動する。そして、決して諦めない。それがルルージュの強さを支える理由のひとつなんだって、あたしにもわかった。

そうして「最強」武器を持つ相手から惜しみない賛辞を受けて、だけど、ルルージュの態度はやっぱり変わらなかった。ラフィールのほうを見るでもなく、独り言のように呟く。

「……それで、続けますの」

「ん……どうしよっか。正直、毒気抜かれちゃったな」

その言葉に、あたしは心底ほっとした。ルルージュの平手打ちが、ここまでの効果を狙ったものだったらすごいと云うしかないけど……実際はどうなんだろう？ もちろん、ルルージュの横顔からは、そんなの窺い知ることにはできないけど。しかし、ラフィールの豹変には、予想通りジョルジュが嘔みついてきた。

「ラフィール！ あたしはまだ……」

「ま、今日はこの辺にしておきなさいよ。今はまだルルージュに叶わないって、あんたも学習したでしょ？」

「……っ」

血がにじむほど唇を噛みしめて、ジョルジュはつつむいた。本当、悔しいんだなあ。

ルルージュを敵視する気持ちには同意できないけど、あの純粹さは……なんて云うか、心を打たれるものがある。

ラフィールも同じように考えているのか、とても優しい目をして、ジョルジュの髪をくしゃくしゃと撫でた。

「いつか、勝てばいいのよ。焦らないの」

「……ん……」

ジョルジュは小さく頷いた。

ルルージュはやっぱり無関心な風に立っていて、なぜか千鳥は、とても悲しげな表情をしていた。

これで本当に一件落着。

そう思ったのは、やっぱりあたしの早とちりで。ギャアアア！と耳障りな叫び声が上がった。

とっさに振り向くと、今では見慣れたモンスター、ブーマがこちらに迫ってこようとしているところだった。

そういえば、モンスターも出るんだっけか。でも、こっちはハンターズ三強が揃ってるんだし、ホログラフィーだって話だし。

それに何より、せっかかない雰囲気でもとまりそうになっ

たところへ水を差された感じで、あたしたちの間には、どうにも白けた空気が漂ってしまった。

「うるさいよ！」

ジョルジュがドラゴンスレイヤーを掲げて、ブーマに走り寄っていく。沈んだところを見せてしまった照れ隠しもあるんだろくな、なんて、あたしは気軽に考えていた。

そのとき、ルルージュがふつと眉をひそめた。

「……違いますわ」

「……え、ルルージュ、なに？」

「！ ジョルジュ、下がちなさい！」

「……へ？」

目を丸くしてジョルジュが振り返ったとき、ブーマが太い腕を振り下ろした。とっさに駆け寄ったラフィールがジョルジュを引き寄せたものの、ぎりぎり間に合わず、鋭い爪がジョルジュの脇腹をかすめた。吹き出す鮮血。

「……え？ 鮮血？」

「ジョルジュ！ ……そんな……!？」

「……本物ですわ」

ソウルイーターを構え直しながら、ルルージュが呟いた。

「いつてええええ！ 何これ、どういうことっ!？」

傷口を手で押さえながら、ラフィールに抱えられてジョルジュが下がった。代わりに、あたしたち三人が前に出る形になる。

そんな、モンスターはすべてホログラフィーのはずじゃなかったの？ 実物が紛れ込んでるなんて……そもそも、紛れ込む「なんてあり得ないはずだ。」

「誰かが……細工したってことね」

ラフィールがジョルジュにレスタをかけつつ、呟く。

細工？ そんな、なんで？ いたずらにしては、タチが悪すぎる。

だとしたら、そこにあるのは……明確な悪意？

「心当たりは？ ……ありすぎか」

「……」

「お互い様でしょ」

千鳥の言葉に、ラフィールが軽く肩をすくめて見せた。

誰かが、あたしたちを殺そうとしてる？ そんな、なんで？

「……来ますわよ」

すぐパニックに陥りそうになるあたしを、いつもルルージュの低い声が現実に戻してくれる。ブーマは腕を振り回しながら、あたしたちに迫るうとしていた。

「ど、どうする？ 今の武器じゃ」

「ラフィール」

こんなときでもやっぱりルルージュは取り乱したりしない。ブーマを睨み据えたまま、いつもと変わらない調子で呟いた。

「とにかく管制室に連絡して、シミュレーションの中断を」

「OK。……でも、任せて大丈夫？」

「……」

ルージュは答えない。その姿に、ラフィールは小さく微笑んだ。

「ごめん、バカな質問だったわね。ジオルジュはまだ動けないから……頼んだわよ」

云い残して、ラフィールは駆け去った。端末のところまで戻って、シミュレーションを中断させるためだ。

その背を見送っていたジオルジュが、ドラゴンスレイヤーを支えに立ち上がった。

「あたしが……食い止める。あんたたちは、逃げなよ」

「な……何云ってるの、ジオルジュ！ そんなケガで……」

「こんなケガだから、さ。一緒に逃げることはできない。なら、ここで時間稼ぎするよ。ラフィールが管制室と連絡をつければ、それでおしまいさ」

「そんなの……！」

「いいから、早く！」

叫びながら、ジオルジュはルージュを睨んだ。どれだけ衰弱していても衰えない、強い瞳の光で。

「あんたに守ってもらうなんて、あたしはまっぴらなんだよ！」

「ジオルジュ……」

ルージュは興味なげにジオルジュを一瞥した。そして、すぐに視線を前に戻すと、ため息を吐き出した。

「あなたが生きようが死のうが、私には関係ありませんわ。死にたいなら、どうぞご自由に」

「ルージュ！ そんな……」

「けれど、私は逃げません。……二度と逃げない。それが、私がこのソウルイーターを振るう、唯一の資格」

「……！」

「……」

ジオルジュが息を飲み、千鳥が目を伏せた。

ルージュはいつもどおり、優雅に、艶やかに進み出る。舞踏会にでも出るみたいな足取りで。だけど、その手には禍々しい大鎌を携えて。

「千鳥」

「は……い」

「奴の気をそらして」

「了解」

「北都さん」

「は、はいっ」

「千鳥をフォローしてください」

「……はいっ」

あたしが答えたときには、もう千鳥は走り出していた。ダブルセイバーを回転させながら、プーマの体に叩き込む。だけど、シミュレーション用に抑えられた出力じゃ、本物のプーマに傷ひとつ負わせることはできない。

プーマが腕を上げて、その爪で千鳥を引き裂こうとする。

あたしは慌ててハンドガンに向けて、引き金を振り絞った。

プーマの注意が離れた隙に、千鳥が腕をすり抜けて再びダブルセイバーを振るう。

その間に、ルージュはプーマの背後へ回っていた。

だけど、どうするつもりだろう。たとえ後ろを取ったって、今の武器じゃプーマを倒せない。まさか、またソウルイター

のあの忌まわしい力を使うつもりなんだろうか。

あたしは不安と焦燥でルージュの顔を見つめたが、やっぱりその表情に変化はなかった。ただ何かを狙うように、鋭い瞳で鎌を振り上げていた。

そして、完全にプーマの死角に回り込んだそのとき。

空を裂く唸りと、プーマの耳障りな悲鳴が、同時に響いた。

辺りに鮮血が飛び散る。

「……………」

あたしはその光景に、思わず口元を押さえてしまった。

ソウルイーターの刃は、ブーマの左目に深々と突き刺さっていたからだ。

確かに、ブーマの体を貫くことはできなくても、あそこなら今の武器でもどうにかなる。だけど、ブーマの目は、その巨体に似合わずいぶん小さい。動き回っている敵のその一点を、過たず狙い打てるなんて。

……そして、その残酷とさえ云えるような行動を、ためらいもなく取れるなんて。

しかも、ルージュはそこで刃を引いたりしなかった。細い華奢な腕からは想像できない力で、さらにソウルイーターを深く挟り込ませていく。あの大きな鎌はやがて脳髓に達し、致命傷となるだろう。

ブーマの断末魔の叫びと、まき散らされる血飛沫に、あたしは思わず耳を塞いで、目を閉じてしまった。

あまりに正視しがたい、凄惨な図だったから。そして、その返り血を浴びて、ルージュが笑っているように思えて……それを見てしまうのが、とてもとても怖かったから。

次の瞬間、辺りがぱーっと明るくなった。

シミュレーションバトルは、終了したのだ。

シティに戻ったあたしたちは、ハンターズギルドから事情聴取を受けた。

だけど、あたしたちは訳もわからず襲われた方だ。事情なんて、わかるわけがない。ギルドの方も、ルージュ、千鳥、ラフィールという豪華なメンツに恐れをなしたのか、早々に解放してくれた。

……なんだったんだろう、ほんとに。とりあえず全員無事だったからよかったけど……冗談じゃすまないよ、こんなこと。

「大変なことになっちゃったわね。ごめんなさい、私がバトルしようなんて云ったから」

ラフィールがジョルジュに肩を貸しながら、申し訳なさそうに頭を下げた。

千鳥がニコニコと笑いながら、首をぶんぶん横に振る。

「ラフィールのせいじゃないよ」

「ありがとう。ジョルジュも無事で、よかったわ。ほら、

あんた、お礼云いなさいよ」

ラフィールに促されて、ジョルジュは懨然とした顔であたしたちを見回した。

……結果としては、ジョルジュはあたしたちにルージュに守ってもらった形になった訳だ。ジョルジュにすれば、それは耐え難い屈辱なんだろう。

ジョルジュは何度かためらったあと、キッと顔を上げてルージュを睨んだ。

「……あんたは、強いよ、ほんと」

「……………」

「あのときも、それだけ戦えりゃ、彼は死ななかつただろう

に

「！」

ルージュの表情が、変わった。

彼女が怒りを露わにするのは、もう何度か見たことはある。心に刺さるような悲しみも、一度だけ。

だけど、今は。蒼白になって、小刻みに震えてさえた。まるで、何かに怯えるかのように。込み上げるものに、じつと耐えているかのように。

その姿に驚く間もなく、ヴンツという音が響いた。見ると

なんと千鳥がダブルセイバーを抜き、フォトンの刃をジョルジュの首筋につきつけていたのだった。

「千鳥……!?!」

シテイで武器を使うのは御法度だ。見つかったら、ハンターズライセンス剥奪じゃすまない。

だけど、あたしは止められなかった。

そこにいるのは、あたしが知っている千鳥じゃなかった。

表情は変わらず、ニコニコと微笑んでいる。でも、そこには暖かみなんて、欠片もなかった。感情のない、「笑顔」という名の仮面。

「云っていいことと悪いことがあるよ、ジョルジュちゃん」

「……」

あたしと同じく、息を飲んでいるジョルジュ。千鳥はやっぱりおっとりした口調で、恐ろしい言葉を続けた。

「もう一度、云ってみる？ そしたら、殺してあげるから」

「」

「……」

「ち、千鳥……」

ラフィールも、もちろんあたしも為す術がない。

凍り付いた空気を、やがて低い、静かな声が破った。

「おやめなさい、千鳥。似合いませんわ」

「……」

千鳥は無言でダブルセイバーを収めた。一瞬前の氷のような雰囲気は消え、いつものように優しく、悲しげな様子でルージュを見つめる。

ルージュは誰とも目を合わせず、端然と立ち尽くしていた。

「云われるまでもありませんわ。そつ……この緋色はあのひとの血の色……。忘れるはずがない……」

そう呟いて、静かに瞳を閉じた。

その姿を見た瞬間、あたしは考えるより先に行動していた。

ジョルジュの前に立ち、その頬をひっぱたいたのだ。

「な……っ」

「謝つて」

目をむいたジョルジュに、あたしは涙目でそう云った。まっすぐ、その紅い瞳を見つめて。

もちろん未だあたしには事情はわからない。立ち入るべきことじゃないかも知れない。

だけど、やっぱり、許せないと思った。

「あたし、ジョルジュを嫌いになりたくない。だから、謝つて」

「……」

「お願い」

ジョルジュが戸惑ったようにあたしを見つめ返す。そして、ラフィールの方に目を向けると、ラフィールも少し厳しい顔で頷いた。

ジョルジュは唇を噛みしめて、ただ無言で、頭を下げた。

*

ジョルジュとラフィールが帰ったあと、あたしたちはその

場で何をするでもなく、ぼんやりと佇んでいた。

これは、実はすごく珍しいことなのだ。

いつもなら、ルルージュは用が終わればすぐ引き上げてしまふ。彼女とプライベートな時間を過ごしたことは、全くない。千鳥も、似たようなものだ。

だけど、このときは何故か誰も帰ろうとはしなくて。だけど、特に話題もなくて。ただ意味もなく、時間を三人で共有していた。

それはすごく贅沢なことだったのかも知れない。そのときはそんなこと、わかりもしないことだったんだけれど。

「……あ、そうだ！ あたし、考えたんだけどさ」

「……」

「え、なにになに〜？」

いつもと同じように、ルルージュは無関心で。千鳥はニコニコと微笑んでいて。

「チーム名！ 『三色旗』なんて、あんまりじゃない？」

「あ、そうだね。あのセンスはないよね〜」

ころころと千鳥が笑う。ルルージュがため息をつく。

あたしは勢い込んで、言葉を続けた。

「でしょでしょ！ それでね、考えたの！」

「ほんとう？ どのなの〜？」

「んつとね、『ルージュ』！」

「……え……」

ルルージュ

「……紅……？」

千鳥が言葉を失い、ルルージュが物憂げに眉をひそめた。

あたしはその反応は予想していたので、怯まないよう自分を内心鼓舞しながら、思いつきり早口でまくしたてた。

「そう！ やっぱ、うちのチームのリーダーはルルージュで

しょ？ それで、ルルージュのシンボルカラーは赤だもの！」

「……」

「……」

「あたしはね、ルルージュにその色、すごく似合ってると思っただ。髪の色も、すごく素敵。他の色は、やっぱりちょっと考えられないな」

「……」

「……」

「ルルージュがそのことをどう考えてるのか、あたしにはわからない……。でもでも、あたしは、すごく好きだから。」

ルルージュや千鳥と同じチームだって、あたしは誇りに思っ

て……。それで……っ」

だんだん、声が小さくなってしまふ。いやだ、泣きそう。

そのとき、ルルージュが身を翻した。口元に小さな笑みを

浮かべて、小さな小さな声で呟きながら。

「ご随意に」

そして、振り返らずまっすぐ歩き去るその後ろ姿を、あた

しは茫然と見送っていた。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか〜」

千鳥の声に、やつと我に返る。あたしは千鳥の穏やかな笑

顔に、すぐるような視線を送っていたかも知れない。

「ねえ……やっぱりまっすぐか？ 今の……」

「ルルージュがいつて云ってるんだから、いいんじゃないかな〜」

「そ、そうかな」

「私も、いい名前だと思うよ〜」

ニコニコと微笑みながら、千鳥はそんな風に云ってくれた。

それでやつと、あたしは笑顔で頷くことができた。

「……うんっ」

のちにハンターズギルド史に刻まれるチーム「ルージュ」
が、このとき誕生した。

けれど、このあと、あたしたちを襲う出来事を知っていれば、あたしはもっと違う名前を考えたかも知れない。

そう、こんな、血の色を連想させる名前じゃなくて……。

Phantasy Star Online Ver.2
'Story of Scarlet Sorceress' Episode II
"Call us, 'Rouge!'"
end

Intermission - II

殺風景な部屋だった。

女性らしい調度品などは、まったくない。ベッドと机、クローゼットと、必要最低限の家具しか置いていなかった。

まるで自身の心象風景をそのまま映したような寂寥とした部屋で、ルージュは独り、グラスを傾けていた。傍らには、すでに半分ほど中身を失った火酒のボトルが置かれている。手にしたグラスを、ルージュが揺らしてみる。透き通った氷が、カランと音を立てた。

血のような赤に浮かぶその姿は、突き立てた刃を思わせた。

「チーム名？ そうだな、『ルージュ』ってのはどうだ？」

ルージュ
（紅？）

（そう、俺たちにピッタリだろ？）

胸の底から甦る懐かしい言葉、忘れることのできない笑顔。ルージュは一瞬、微笑みを浮かべたあと、ひどく疲労感をにじませて、ため息をついた。

そのとき、インターホンの音が響いた。

「……」

ルージュを訪ねる人物など、一人しかいない。承知していたけれど、ルージュは無視を決め込んだ。今は気を遣ってなどほしくない。

しかし、訪問者は辛抱強くインターホンを押し続け、それどころか、やがてどんとどんとドアを叩き始めた。

「ルージュ……。いるんでしょ……。わかってるんだから……。開けてよ、千鳥ちゃんだよ」

……ほとんど酔っぱらいが騒いでいるとしか思えない。深い深いため息と同時に、ルージュがうつうつしげに立ち上がるうとしたとき。

「も、勝手に入っちゃうからね」

そう聞こえると同時に、部屋の中にまばゆい光が現れた。

わずかに眉をひそめて見つめるルージュの前で、光はやがて、千鳥の姿となった。

「えへへ、こんばんは」

「……」

ルージュは特に驚きもしない。ただ不機嫌そうにじっと千鳥を見つめ、再び深いため息をついた。

「……誰かに見られたら、どうするんですの」

「あはは、実験動物だって、ばれちゃうね」

「……千鳥」

ルージュの視線と口調が険しいものになる。千鳥は変わらずニコニコと微笑んだままだった。

「ごめんごめん、云わない約束だったね。でも、ルージュが、すぐに入れてくれないから、いけないんだよ？」

「……」

ため息で答えるルージュ。

千鳥は笑顔でベッドに腰掛けた。

「いい加減、私の分の椅子ぐらい、用意してよ」

「……必要ないでしょう」

素つ気なく答えながら、ルージュは新しいグラスを千鳥に差し出した。千鳥がそれを受け取ると、両手に自分のグラスとボトルを持って、千鳥の隣に腰を下ろす。そして、千鳥のグラスに、赤い酒を注いでやった。

「ありがと。それじゃあ、かんぱーい」

「……」

グラスの重なる音が、静かな部屋に響いた。

ルージュは一口だけで軽く喉を湿らせ、千鳥は一息に飲み干してしまった。

「ぶはっ。働いたあとはおいしいね」

「……」

「お代わり、もらうね」

「……」
 「うん、おいしい。やっぱり、私が選んだだけはあるよね」

「でも、一緒に飲もうねってプレゼントしたのに。一人でもうこんなに空けちゃって、ずるいよ、ルルージュ」

「……千鳥」

最初からハイペースで飲み続ける千鳥と対照的に、手の中でグラスをもてあそんでいたルルージュは、やはりいつもどおりあらぬ方向に視線を向けたままで呟いた。

「用があるなら、早くすませなさい」

「……つれないなあ、も」

微笑みつつ、千鳥は珍しくため息をついた。そのまま空になったグラスをじっと見つめている。ルルージュも二度は促すことなく、その姿を横目で見ていた。

「……ねえ、ルルージュ」

「……なんですの？」

グラスから顔を上げて、千鳥はルルージュに面を向けた。その表情から微笑みが絶えることはなかったが、少し悲しげに瞳を翳らせていた。

「北都ちゃんに嫌われちゃったかな、私」

「……」

ルルージュの過去の傷を抉ったジョルジュの言葉。それを聞いたとき、千鳥は思わず我を忘れた。そのことを間違っていたとは思わないし、後悔もしていない。けれど。

ルルージュは千鳥のグラスに酒を注ぎ直してやりながら、いつもどおり、つまらなそうに答えた。

「あの程度で嫌われるなら、私など顔も見たくないと思われているでしょうね」

「……ルルージュ……」

一瞬、千鳥の目が丸くなる。しかし、次の瞬間には、満面の笑顔で強く頷いていた。

「あはは、うん、そっだよね」

「……そのまま強く同意すべきところではないと思いますけど」

「あはは、ごめ〜ん」

ルルージュは深いため息を吐き出す。そこでようやくグラスを口元に運び、赤い酒を飲み干した。

「……それで、本題はなんですか」

「……え〜？」

「あなたが自分の悩みだけで、私のところに来ることはありませんもの」

「そんなことはないと思うけどな〜」

ルルージュは答えない。本題に入るまで、無駄な話はする気がない、という態度だ。

千鳥がなんの話をしたのか、ルルージュにはわかっていなかった。だから、はじめ部屋に入れまいとしたのだし、話を始めた以上、早く終わらせてしまいたかった。

千鳥にもそのことはわかっていたので、彼女は伏し目がちに言葉を続けた。

「うん……じゃあ、訊くけど……」

「……」

「チーム名……ほんとにいいの？ 『ルルージュ』って……」

「……」

「やっぱり嫌だっと思うなら……、私から、北都ちゃんに云うよ〜？」

「……無用ですわ」

口調こそそっけないままだったが、ルルージュはわずかに微笑んでいた。千鳥は驚いて、その横顔を見つめた。

「チームを組むことなんて、二度とないと思っていましたけ

ど……」

「ルージュ……」

「私がいるチームは、『ルージュ』以外ありえせんもの。あのひとがくれた、大切な名前……。想い出も、痛みも、傷も、死神の鎌も……。あのひとが残してくれたもの……。何一つ捨てられない……」

記憶の中に沈み込むように、ルージュは目を閉じた。

その姿を、千鳥は痛ましげに見つめていた。

千鳥には、わからなかった。ルージュの言葉を喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか。

「チーム」という意識をルージュが持つようになったのは、いい変化のように思える。頑なに他者に心を閉ざしてきた、これまでに比べれば。

けれど、一方では、やはり彼女は未だに過去しか見ようとしていないのだろうか。『ルージュ』というチーム名は、新しい一歩ではなく、ルージュを過去に縛り付ける鎖に過ぎないのか。

……そうだとしても。

ルージュがそのチーム名を名乗る気になったのは、過去を乗り越えようとする意思の表れだと、千鳥は信じたかった。自身の罪を忘れないためだなんて、そんな風には、考えたくなかった。

「……千鳥こそ」

「え、え〜？」

不意に呼びかけられ、千鳥は狼狽した。その様子に、ルージュはいぶかしげに眉をひそめたものの、何も追求せず言葉が続けた。

「ラフィールに、弥十郎のことを聞かなくて、よろしかったんですの」

「……あ〜、そのこと〜」

困ったように千鳥は面をそらし、今度はルージュがじつとその顔を見つめることになった。

「ラフィールは何も知らないようでしたけど……。彼女のところに、弥十郎もいるのでしょうか？」

「うん〜、そうみたいだね〜」

歯切れの悪い台詞。しかし、ルージュは構わずに話を続けた。

「あなたがどんな想いで助け出したかも知らないで、またこの世界に戻ってくるなんて……。本当、不出来な弟ですこと」

「あはは〜、ひどいな〜、ひとの弟をそんな風に〜」

「事実ですわ」

「も〜、ルージュったら〜」

苦笑しつつも、千鳥は嬉しくて涙が出そうだった。ルージュは自分のために、弥十郎に対して腹を立てているのだから。

「あのコももう子供じゃないから〜、自分で考えて、そう決めたんなら、しょうがないよ〜」

「……」

沈黙が降りた。

それは互いの過去の痛みに触れた気まずさから来るものではなく、ただいたわりに満ちた静けさだった。だから、千鳥は穏やかに微笑み、ルージュは何事もなかったようにグラスを傾けていた。

*

同じ頃、シティの一角では、新しい邂逅が生まれようとしていた。

「あ……」

「……よお」

北都は少し前に別れたばかりの紅い髪の少女と再会し、思わず言葉を詰まらせた。

正直、少し気まずかった。ケンカ別れに近い別れ方だったからだ。

だが、一方の少女　ジョルジュは、少し困ったように頬をかいたものの、ニカツと破顔して見せた。その笑顔に、北都は密かに胸を撫で下ろした。

「さっきはどうも。いい経験させてもらったよ」

自分の頬を軽く叩きながら、ジョルジュはウィンクした。

北都は赤面して、慌てて首を振る。

「ご、ごめん、あたし、つい、カツとして……」

「いいって。認めるのは癪に障るけど……あれは……あたしが悪かったよ」

「ジョルジュ……」

「ひとり？　だったら、ちょっとつきあつてよ」

そう云って、ジョルジュが北都を伴ったのは、ハンターズが多く集まるバーだった。入口の前で、北都が思わず足を止めて、目を白黒させる。

「え、こ、ここつて？」

「へ？　バーだよ。来たことあるだろ？」

ごく当たり前のように尋ねるジョルジュに、北都はぶんぶんと大きく首を横に振った。

ジョルジュは意外そうに目を大きく開くと、笑いながら北都の肩を抱いた。

「なーんだ、ルーージュ辺りに悪い遊びを教わってるんじゃないかと思っただけど、見た目通り、ウブなんだね」

「ル、ルーージュは、そんな……」

「はいはい、じゃあ、勇気を持って大人への一步を踏み出そうねー」

「え、そ、そんな、ちょっと、ジョルジュ……」

結局、北都は強引にバーへ連れ込まれてしまった。慣れた様子で歩くジョルジュのあとをおっかなびつくりでついて行き、テーブルにつく。

「連れがもう一人、あとから来るんだけど。始めてよ」

「う、うん」

「あたしはラム酒ね。北都は？」

オーダーを取りに来た店員にそう云い、ジョルジュは北都を振り返った。

北都はこういう場所で何を頼めばいいのか、想像もつかない。ただ、自分が飲み慣れているものを口にした。

「えつと、じゃあ、ミルク」

「……かしこまりました」

オーダーを控える店員の口元が、微妙に歪んだ気がする。やっぱり場違いなものを頼んじゃったんだろうか、と北都が顔を赤くしたとき。

「おい、お前、今、笑っただろ」

ジョルジュが声を荒げて、立ち上がっていた。今にも店員につかみかかりかねない形相に、北都の方が驚いてしまう。

「ミルク頼むと、なんかおかしいのか？　何様だ、お前」

「い、いえ、そんなつもりは……」

「ちょ、ちょっと、ジョルジュ、あたしはいいから……」

慌てて北都が止めようとするが、ジョルジュは収まりがつかない。店員の胸倉を掴んで、拳を振り上げた。

「ダチを笑われて、黙つてられるか！」

「ひつ……」

店員と同時に、北都も思わず目を閉じる。だが、ジョルジュの拳は店員の頬にヒットする前に、後ろから伸ばされた手に止められていた。

「こんなとこで騒ぎ起こすなよ。またラフィールに怒られるぞ？」

「……え……？」

恐る恐る北都が目を開けると、一人の男性が立っていた。ハンターだろう、おそらく種族はヒューマン……だから、ヒューマーということになる。歳は北都やジョルジュと同じくらいに見えた。穏やかな風貌で、誰かに似ているように北都は思った。

「……邪魔するなよ、弥十郎」

ジョルジュが不機嫌そうに、弥十郎と呼んだヒューマーの腕を振り払った。弥十郎は苦笑しつつ、肩をすくめた。

「まあ、落ち着けて……あんたも、さつさと行きなよ。あ、俺もミルクね」

弥十郎がそう云うと、店員は慌てて何度も頷きながら、下がっていった。

その姿を見送って、ジョルジュは憮然としたまま、弥十郎は微笑んで腰を下ろした。期せずして、二人で北都を囲む形になる。

「……えっと……」

「あれ？ 失礼。ジョルジュの友達？」

「は、はい、はじめまして、北都です」

「弥十郎です。よろしく」

笑顔で差し出された手を握り返しながら、北都は考えた。

そうやって笑うと、やっぱり誰かに似てる。

「でも、珍しいよな、ジョルジュの友達なんて。どついう知り合い？」

「……なんか、失礼な言い草だな」

「ほんとのことだろ。血の気が多いから、敬遠されるんだよ」

「人のこと、云えた義理かよ」

ぼんぼんとやり取りされる応酬を、北都は目を丸くして聞いていた。

本気のケンカではないことは、見ていればわかる。二人は

笑顔で軽口をたたき合っているだけだ。

そうした気軽な「仲間」同士の会話を、北都はほんの少しうらやましく思った。キャリアが違いすぎる千鳥やルージュとは、いくら打ち解けようとも、こんな風には喋れない。

「……で、話を戻すけど、どついう知り合い？ 訓練所で同期とか？」

「ううん、そうじゃなくて」

「タイムマン張って、ぼこぼこにされたんだよ。あたしは今日から、北都の舎弟さ」

どつ説明したものが、考えながら北都が口を開いた横から、ジョルジュがとんでもない解説をした。北都は顔を赤くして、思わず立ち上がってしまった。

「なっ……なに、云ってるの、ジョルジュ！」

「はははっ、まあ、似たようなもんじゃん」

意地悪く、ジョルジュは笑ってみせる。ピンタしたこと、本当はかなり根に持ってるんじゃないか、と北都は内心考えた。

「ん？ ……あー、ひよっとして、今日、バトルしたって相手か？」

「……はい」

「ま、そゆこと」

「あつたく、人を散々待たせておいて、やっと連絡来たと思つたら『ちよつとバトルしてくるから、解散』だもんな」

「それはファイルに云ってよね」

「どつせ、きっかけはお前なんだろうが」

「……うるさいな」

放っておくと、すぐに二人はこの調子になる。これはファイルも大変だ。北都はついつい笑ってしまいそつになるのを、どうにかこらえていた。

しかし、次にジョルジュが口にした話題に、北都の表情は

さつと翳った。

「それにしても、ルルージュの性格の悪さは知ってたけど、あの千鳥つてのも、おっかないんだな」

「……千鳥……？」

「あー……うん……あれは、あたしもちょっとびっくりしたけど……」

北都は千鳥の笑顔が大好きだった。どんな不安も寂しさも、あの笑顔を見ていると消えていった。

憎しみや怒りなんて、千鳥には無縁だと、なんの根拠もなく思い込んでいたのだが。

「でも、あれも、ルルージュを大事に想ってるからだよ。それだけ。あの二人の結びつきは、あたしなんか想像できないくらい強くて、それで」

「……わかってるよ」

ぶっきらぼうに呟いて、ジョルジュは北都から目をそらした。この話をしてしまったことを、後悔しているようだ。

だが、意外なことに弥十郎が、話を切り上げさせてくれなかった。

「ちよつと待ってくれ、千鳥つて……？」

「ああ、この子のチームメイトだよ。ルルージュと千鳥とチーム組んでるんだ。たいしたタマだよな」

からかうように、ジョルジュが笑う。北都はそれに頬を膨らまして抗議しようとしたが、突然、弥十郎に肩を掴まれ、目を瞪ることになった。

「わ、な、なんですか？」

「姉さんと……一緒のチームなのか？」

「え？ え？ 姉さん？」

「おい、ヤジユ、お前、何を云つて……」

「姉さんのこと教えてくれ！ 頼む！」

「え？ え？ え？ 姉さんつて……千鳥のこと……？」

*

ボトルをすっかり空にしたところで、千鳥は立ち上がった。お互い、結構な量を飲んだはずだが、一人とも少なくとも見た目には、変化は見られなかった。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「……」

無言で頷くルルージュ。その横顔に、千鳥は少し淋しそうな視線を向けた。

千鳥はルルージュの部屋に泊まったことがない。というより、ルルージュは絶対に、誰かがいる場所で眠ろうとはしない。たとえ、それが千鳥であっても。

その本当の理由を知っているから、千鳥にも無理強いすることはできないのだった。

「あ……そうだ」

ドアの前まで進んだところで、千鳥は足を止めて振り返った。ルルージュはベッドに腰掛けたままで、千鳥の方を見ようともしない。ぼんやりと空を見据えていた。

「肝心なことを忘れてたね。今日のバトルに、細工したのは誰かってこと」

「……」

ルルージュは全く興味がない様子で、答えない。千鳥は何度かためらったが、一度唇を噛むと、話を続けた。

「ブラックペーパーの意趣返しっていうのが、妥当な線かなって思うけど……」

「……」

「ひよつとしたら……『教授』が絡んでるかも知れない……」

……その言葉に。ルルージュはゆっくりと面を上げた。

唇の端が歪む。笑顔と呼ぶにはあまりに恐ろしい、狂気を

湛えた。

「望むところすわ」

「ルージュ……」

「ずっと姿をくرامせていた卑怯者が、向こうから仕掛けてくるなんて。願ってもないこと」

「……」

息を飲んでルージュの言葉を聞いていた千鳥は、深いため息を吐き出した。いつも太陽のようにおおらかに笑う千鳥が、そのときばかりはひどく疲れ果てて見えた。

「……北都ちゃんは……巻き込みたくないね……」

「……」

ルージュの表情から狂気の笑みが消える。物憂げに千鳥を一瞥し、そしてまたあらぬ方向を見据えながら、呟いた。

「それは、北都さんが決めることでしょう」

「……うん……そうだね……」

答えながら、千鳥はうなだれていた。

仲間として、一緒にいたいと北都は云ってくれた。自分もそう望んでいると思う。絶対に口にしないけれど、ルージュだって、きつと。

だけど、やはり私たちは彼女を拒むべきだったのかも知れない。彼女と共に歩むには、私たちはあまりに、血にまみれすぎている。

「それは、千鳥も同じすわよ」

「……え……？」

思いがけない言葉に、はっと千鳥は我に返った。

ルージュが、いつの間にかまっすぐ千鳥を見つめている。貫くような、厳しい視線。

「私に義理立てする必要はありませんわ。あなたはあなたの進むべき道を、自分でお選びなさい」

「ルージュ……」

その言葉を聞いて、沈んでいた千鳥の顔に、笑みが広がっていった。明るく、穏やかで、とても悲しげな微笑。

「私は自分で選んで、ルージュと一緒にいるんだよ」

「……」

「ルージュをひとりにはしないから……絶対……」

「……くだらないことを」

やはりいつもどおりに。つまらなそうに、ルージュは呟いて、面をそらした。

しかし、その伏せた瞳には、悲しみが宿っていた。千鳥はそれだけで報われた気がして、微笑んだままドアを開いた。

「じゃあね。おやすみ、ルージュ」

「……おやすみなさい」

ルージュの声と共に閉じたドアに背をもたれさせ、千鳥はしばし立ち尽くしていた。

もう一度、深いため息を吐く。そして、自分の部屋に向かって歩き出した。

すでに深夜なので、居住区を歩く人影もない。千鳥は誰にも会うことなく、自室に辿り着いた。

ドアを開けると、暗闇が広がっている。千鳥はなぜか灯りをつけないまま部屋に入り、ドアを閉ざした。

「ただいま」

何もない闇に向かって、ニコニコと微笑みながら帰宅のあいさつをする。

返ってくるものは、無論、静寂。

しかし、千鳥はやはり微笑んだままで、首を軽く傾げた。

「家の人が帰ってきたら『お帰りなさい』って云うものだよ、マリア？」

「……」

闇の中で、気配が動いた。それは、苦笑、だっただろうか。次の瞬間、二つの光点が浮かび上がった。そこに潜むもの

が、目を開いたのだ。

「さすがね。驚かそうと思ったのに」

「あはは、残念でした」

「マリア、と呼ばれた者が、ゆっくりと部屋の隅から歩み寄ってくる。間に慣れたもとより、千鳥には暗闇など意味がなかったのだが、千鳥の目には、黒いレイキャシルが映っていた。

「お久しぶり。あなたがいるってことは……やっぱり、そうなんだね？」

千鳥は笑顔だった。だが、それは、今日、ジョルジュに向けた笑顔と同じものだった。感情のない、仮面の笑顔。

「ええ。『教授』がお待ちかねよ。いい加減、機嫌を直して帰ってこいって」

「……ルージュなら、『寝言は寝てから云うものですわ』って云うだろうね」

マリアは冷たい目を千鳥に向けた。

そもそも、アンドロイドである彼女に、多彩な感情表現は望めない。だがそのことを差し引いても、マリアの表情はあまりに冷徹で、無機質だった。

「それが、返事だと思っていのかしら？」

「うん。よろしく」

「いつまで、ルージュなんかには肩入れしてる気なの？ 傷の舐め合いなんて、見苦しいわよ」

「マリアこそ、人間嫌いのくせに、どうしていつまでも『教授』の言いなりなのかな？」

辛辣な応酬に、マリアが肩をすくめた。無表情だった顔に、感情が浮かんでくる。

それは、嘲笑だった。

「造物主には逆らえないわ。そうプログラムされているもの。

あなたもそうじゃないの？」

電光が走った。

千鳥が抜きはなつたダブルセイバーの刃が、マリアの首筋を狙う。

同時に、マリアの抜いたハンドガンの銃口が、千鳥のこめかみに押しつけられた。

あと一歩で、どちらかの命が失われる。あるいは、両方の。そのままの姿勢で、二人の視線は激しくぶつかり合っていた。

いつもの笑顔さえ失った千鳥の表情は、冷たく無機質で、あまりにマリアと似ていた。

「……消えて」

千鳥が刃を引きながら、呟く。

マリアもハンドガンを下ろし、何も云わず部屋から出ていった。

孤独な暗闇の中。

千鳥はいつまでも立ち尽くしていた。

end

あとがき

半年ぶりのシリーズ更新でした。書き始めると、まとまってどかっと書くんですけどね。とりあえずここに収録したものでひとまとまりなので、またしばらく休眠状態にはいるかも知れません。ごめんなさいです。

『緋のデスサイズ』はほんとにプロローグ的な代物で、北都ちゃんとルルージュ、千鳥の出会いを書くためのものでしたので、いよいよここからが本題という感じですよ。

ちなみに、私の中の PSO 物語のメインストリームは、実はジョルジュ編です(笑)。なんたって I はキャラですし。ルルージュ編は外伝というか、「ルルージュ事件」と呼ばれることになる、とある出来事の顛末……って感じの予定でした。

いや、今でもその予定なんですけど(笑)。なんか、キャラが育ち過ぎちゃったんで、どうなるか心配です。全体のバランスを取るためにも、いい加減、ジョルジュ編を始めなきゃいけないところなんですけどね。このままだと、ジョルジュはサブキャラとして終わってしまいそうなので、かなり危険です(笑)。

だんだん、PSO 本来の世界観からは離れた、文字通り「八神的 PSO」になってしまいそうですが、お見捨てなく気長におつきあいいただければと思います。

ご感想などいただけると、幸いです。

初出

Intermission

二〇〇二年五月一六日

その名はルージュ

前編

二〇〇二年六月一〇日

中編

二〇〇二年七月一二日

後編

二〇〇二年七月二三日

Intermission - II

二〇〇二年七月三〇日

八神大輔